

5. 評価指標の見直し方法の検討及び今後の課題

水循環評価指標を作成したデータのいくつかは、毎年データが更新され、新しいデータが出される。このように、常に水循環評価指標はアップデート（更新）される必要があることから、データの出典はもちろん、元データからどのような手順を踏んで最終的な指標の図にまで到達したか、そのプロセスが水循環評価指標の見直しに必要となる。

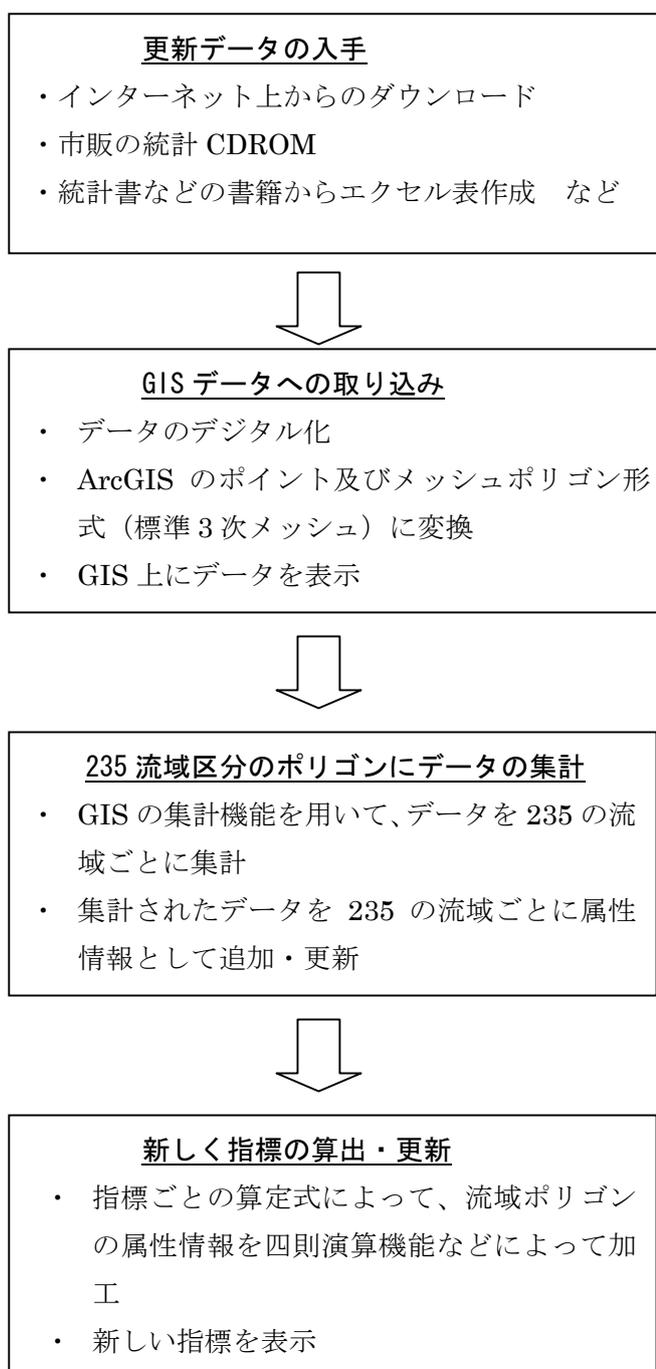


図 5-1 水循環評価指標の見直し手順

今後の課題

流域を単位とする水循環の解明や政策評価、市民活動など、さまざまな検討が行政、市民、企業の間で始まっている。このような流域での検討を進めるにあたって、流域をどのような観点から見るかは重要な課題であり、本業務で取り上げた水循環評価指標は、流域での今後必要となる施策検討などに有効に寄与するものと考えられる。

流域での課題検討を進める際に必要となる流域の範囲を示した図は、河川事務所で作成されている管内図など一部の流域のみで、多くは紙地図としてのみ存在していた。今回、国土数値情報というインターネットを通じて、誰もが入手できるデータをもとに、109 水系を網羅する流域界地図を作成できたことは、これまでの研究業務にはなかった成果と考えられる。

この流域界の中に、単なる流域界地図を超えて、水循環評価指標の実際の数値が盛り込まれて、全国の流域を同じトーンで比較評価できた点が、次の成果と考えられる。概念的に理解できること、たとえば降水量がどの流域に多いかは、頭の中で通常はある程度わかっているが、改めて図として表現することによって、プラス の情報や考えが思い浮かぶ利点がある。

今後の展開としては以下の事項が挙げられる。

- ・ データの多くは 1km メッシュでの情報として格納されているので、情報相互の解析（多変量の空間解析などの統計解析）によって、流域の特性把握・評価を行い、より意味の深いレベルの情報に加工する。
- ・ 流域ごとに指標によって構築された流域診断カルテを作成する。
- ・ インターネット上で、ユーザーが簡単な指標の作成ができるユーザーインタフェースを構築する。
- ・ 今後の流域に関連する新たなデータの整備などを加えて、現在進められている水資源健全化指標などの新たな指標を考案し、現在のものに付加していく。
- ・ 社会経済関連の指標などを取り入れ、今度の人口減少を踏まえた国土計画、気候変動や異常気象に対応する水資源計画などの国土プランに反映する。
- ・ 現在の 1km メッシュの空間解像度をネスティングにより、より細やかな情報として、県や市町村レベルでの、メソ、ミクロの指標構築に寄与していく。
- ・ 1 級水系以外の 2 級水系やその他の流域にも指標作成を空間的に広げし、日本全国をカバーする。